

# 新書紹介

むらを訪ねて水紀行

玉城 哲著

日本経済評論社 A6判 二七五頁 一、六〇〇円

本書は書名にもあるように『水紀行』である。河川や水利のあり方が地域によって多種多様なように、水をめぐる問題も重層化している。自分の足と目で見、農民の話に深くうなづきながら三〇年以上続けてきた調査をもとに川や溜池や灌漑用水を軸に考えをつづつたものである。

私は本書のなかでは現代の農村の変容について最も教えられたことが多かった。まず驚ろかされたのは農業水利の蛇口化であった。河川の水をせき上げて水路を経て、あるいは谷の奥の溜池から小さなせせらぎを流れ、一枚一枚田を越して稲を実らせていたシステムでなくなっている地区があるという。土地

境に対する目や認識が失なわれたとき、我が国の風土はどのようになつてしまふのだろうか。全国的な「都市化」とはこのことではないかとさえ思われた。筆者はさらに「日本の農耕社会はもはや終わった」と述べ、集落や農家のたたずまいは残っているが、生活と意識、くりひろげられる人間関係が大きくかわつたことに言及している。

改良事業のうち圃場整備事業でパイプライン方式がここ十数年来だいぶふえてきたそうである。水田のところどころに立ち上りのバルブを設け蛇口をひねれば水がジャーと出るわけだ。私のもっていた農村イメージはこれでこつばみじんにふぎとんでしまった。絵にならないだけではない、このままいったら都市の住民と同じで蛇口をひねって水が出なくなれば、管理者だけの責任を問ひ、水源地の環境や住民の暮しに何の配慮もなく、資源をムダにする方向に農村までがつきすすむことにならないか。そして先祖代々堰をまもり、水路の整備をし、水源林を共同して保全することで自然とおりあいながら作ってきた環

境に對する目や認識が失なわれたとき、我が国の風土はどのようになつてしまふのだろうか。全国的な「都市化」とはこのことではないかとさえ思われた。筆者はさらに「日本の農耕社会はもはや終わった」と述べ、集落や農家のたたずまいは残っているが、生活と意識、くりひろげられる人間関係が大きくかわつたことに言及している。「そこに住んでいるのは、やや誇張していえば少数の農企業家と多くのサラリーマン、労働者である」。そして彼らは労働の動機すら「貨幣的収入の最大と貨幣的支出の最小」から「貨幣的所得の最大と労働投入の最小」の追求へとかわり「資本主義的企業経営」と似てきてさえているのだ。百メートル先にタバコを買いに行くのに車で行くとか、道普請への参加の減少とかの事例もあげられている。なんでも金ですます時代の到来である。全国的に農業水利施設のスクラップ・アンド・ビルドも進んでいて、小さな溜池などによる共同体管理のものから、大きなスケールの少数の専門家によ

る管理へ進んでいるという。自分たちが自然に働きかけて生産し、生活してきた環境に対して関心を失ない、時間と労働を惜しむとき社会がどうなってしまうか筆者は恐れている。生態学的に安定し、しかも資源節約的で廃棄物も少なく、生物として良好に人間が暮らす方向とは正反対だ、と私も思う。本書では、そのほか農村の河川まで三面張りコンクリートになつてしまつたり、子供が遊ぶ場所などどこにもありそうな農村から児童遊園地の切実な要求が出たりといった「変りゆくむら社会」の記述のあとに「新しい共同社会」という章が設けられ著者の考える方向が示されている。

画・決定・責任にまかせて無用な介入を終らせなければならぬ」としてしまふのである。勿論「責任の分配の展望」もともなわなければならないこともあげながらだ。結論として、新しく共同社会をつくりあげていく核として「共同の労働」をあげている。「金銭的に無償の労働の交換なしに、共同社会を育てることはほとんど不可能」であるし「労働の苦しみをともに味わうことなしに、人びとが連帯の精神とよるこびをとにもすることが難しい」ということは事実である。たいへん困難な課題ではあるが「共同の労働を形あるものとして残し」、その労働に参加した人びとのところの中に成果が共有され、作られたものが利用されることで「人びとの共感の基礎」となりうることをめざすようしめしている。本書においてどうすればこのような方向へ社会を交換できるのかまで要求するのは酷なのかも知れない。目標への道を模索することが読者の分担なのであろう。(公害対策局 松岡恒司)